

兵士たちの死と“郷土”

Soldiers' Death and Their "Hometown"

一ノ瀬俊也

はじめに

- ① 満州事変期の激励・慰問活動
- ② 日中戦争期の激励・慰問活動
- ③ “郷土”による兵士の死の称揚
- ④ 戦後の“郷土”による戦死者顕彰

おわりに

【論文要旨】

満州事変以降の各市町村では、国防同盟会・銃後奉公会などの名称を有する銃後後援団体を設立、歓送迎や慰問などの後援活動、公葬を実施した。それは前線兵士の“労苦”，死の公的な意義づけ、顕彰であった。これを受けた兵士、遺族たちの側も「身命を君国に捧げ」る覚悟を披瀝したり、身内の死者が「護国ノ神トナツテ益々皇基ノ御隆昌ヲ護ラル」だろうなどと繰り返し声明させられたことは、彼らが公定の〈正義〉の論理に同意させられていく過程に他ならなかったのではないかとと思われる。政府、軍が“郷土”の慰問・激励を奨励し続けた理由は、そこにあった。

ただし、戦中戦後を通じて兵士たちの“郷土”がその“労苦”，犠牲の顕彰に努力し続けたことは、遺族たちにとって身内の死の「意義」の説明をうけることでもあった。それが彼らの一定度の謝意を獲得してもいったことは、注目されて然るべきと考える。

キーワード：徴兵制度，慰問，公葬，銃後奉公会，太平洋戦争